

大田区教育委員会教育長様

大田区立多摩川小学校
校長 福地 伸

令和 4 年度 多摩川小学校 学校経営計画

1 教育目標

東京都並びに大田区教育委員会の教育目標を踏まえ、人間尊重の精神に基づき、自主性と創造性に富み、生涯にわたる学習の基礎を培う教育を目指して、以下のような児童を育成するため、教育目標を設定する。

- 正しく ・自分の考えをもち、表現できる子ども ・創意工夫して、解決に努める子ども
- やさしく ・相手の立場に立って、考えることができる子ども
・互いに助け合い、豊かな心をもつ子ども
- 強く ・最後までやりとげる意志の強い子ども ・健康づくりに取り組む子ども

2 目指す学校像（3 か年計画の 3 年目）

力のある学校

～ 子どもの『力』を
育てる学校づくり ～

創立 6 7 年の歴史と伝統を受け継ぎながら、自分が生まれ育った地域に誇りをもち、世界に活躍する子どもを育てる。保護者、地域の信頼に応え、教育目標である知・徳・体の調和のとれた児童の健全育成を目指す。

【本校の現状と課題】

《現状》

令和 2～3 年度はコロナ禍での教育活動になった。様々な行事を削減したため、児童のモチベーションは低下し、いじめ問題などの支障を来した。昨年度の 3 学期には様々な取組を行い、児童の自己肯定感の高揚を図った。その中で実施した「保護者アンケート」では、全 21 項目のうち 19 項目で 90% 以上の肯定的な評価を得た。今年度もコロナ禍ではあるが、保護者への公開を計画し、保護者・地域との「共育」を全面に掲げ、児童の健全育成を目指す。

◇学習について

本校児童は学力的には決して高い水準ではないが、保護者からは「意欲的な学習（読書を含む）、基礎的な学力の定着」等の項目で 95% という肯定的評価を得た。児童調査でも「すすんで学習した」が上昇した。ここ 2 年、図書学習司書とも連携し「読書に関する調査」での読書量の増加も著しい。児童が自主的に学習に取り組む状況を今後も持続させる。

◇生活について

保護者アンケート「児童は社会のルールを守っている」「学校は社会のルールについて指導している」の A 評価が共に 95% を超えた。一方、「あいさつや返事、言葉遣いなどの基本的な生活習慣」については、肯定的評価が 89.7% と下降した。教職員も「自らあいさつをする」という点に課題を感じているので、だれに対しても気持ちよい挨拶ができるように引き続き指導する。今年度も、密を避けるための細かいルールのもと、規律を守り、楽しく生活することを継続し、他者意識をもって生活できるよう指導していく。

◇情操について

「学校は一人一人を大切にし、思いやりの心を育てる指導をしている」の A 評価が 94.7% であった。9 年前から担任一児童の面談を実施し、「学校の担任」という意識から全教職員で協力して子どもを育てる意識で対応している。一人一人の児童を大切にする学校の姿勢として高い評価を受けている。今後も、本校の最も大切にする柱としていく。

平成 27 年度より SR が設置され、矢口小・矢口西小を巡回する拠点校となった。特別な支援を必要とする児童は多く、特別支援校内委員会を毎月開催し、適切な支援を行っていく。

《課題》

(1) 知「学びの力」 基本的な学習習慣と基礎学力の定着

- ・ 区学習効果測定の結果から、児童の学力は少しずつ向上している。しかし、授業の様子や評価結果では、低学年の段階から基礎学力が定着している児童とそうでない児童の二極化が見られる。よって、全ての児童が「わかった 分かった 解った」と実感できる授業を進めて学力を定着させ、達成感や成就感を味わわせ、自己有用感を高める。そのために教員一人一人の指導力・授業力の向上は必須である。教員相互に見合い、指導力・授業力を高める。
- ・ 今年度は幼児教育センターと連携し、スタートカリキュラム＝円滑な学校生活の始まり等を検討・検証する。全学年、学習に集中して取り組むこと、そのために学用品など学習に必要な物をきちんと準備する、家庭での学習時間を十分確保するなど、学習習慣の定着を図る。
- ・ ここ2年、児童の読書意欲は飛躍的に向上している。引き続き、各担任と「司書教諭」「読書学習司書」が連携し、「学習関連図書の活用」や「校内読書週間（年3回）」、「読み聞かせ（水曜日）」等を含めた「読書活動」をさらに充実させ、児童の読書意欲の向上を図る。
- ・ 「総合的な学習の時間」において、地域教材単元の充実と見直しを行い、並行して、ICT機器を活用したプログラミング教育の推進、論理的・科学的な思考力の向上を図る。

(2) 徳「心の力」 基本的な生活習慣の定着、個に応じた指導の充実

- ・ 今年度は特に、挨拶と返事がきちんとできる児童を増やす。ノーチャームであることから、時刻を考えながら行動できる児童は多い。決まりを守って行動することの定着を目指す。
- ・ 校外や学校での生活で、地域社会や学校の一員として責任をもって行動できるようにする。地域からの苦情電話が時々ある。今後も基本的な生活習慣を身に付けさせ、地域・学校の一員としての自己有用感をもたせ、当たり前前行動・責任ある行動ができる児童を育成する。
- ・ 「特別の教科 道徳」を通して、物事を多面的・多角的に考え自己の生き方についての考えを深められるように、「こころの教育」の充実に努める。また、評価の工夫と改善を図る。
- ・ SR対象児童は増加傾向にある。普通学級に在籍する児童に対しても特別支援教育の理念や指導法を生かしていくことで、学習・生活における児童の課題を改善していくことができる。SR拠点校として校内の専門的な教員がいる強みを生かすと共に、コーディネーター・SC・担任等が連携し、個に応じた指導の工夫改善を図る。

(3) 体「体の力」 児童の健全育成を目指す

- ・ 令和3年度から校内研究教科の窓口を「体育科」とし、「自分の言葉で伝え、認め合いながらチャレンジする子」の育成を目指している。人とのコミュニケーションを大切にしながら、さらに高みを目指す児童を育成する。体育科に限らず全ての教育活動で対話的な学習を通して人間関係を築き、主体的にできる喜びやできた喜びを実感させる。

(4) 「家庭・地域之力」 家庭・地域との連携の強化

- ・ 子どもに関する事案や課題に対し、児童および保護者の話を客観的に把握し、問題点や解決策を的確に判断する。その上で、家庭と連携して学習習慣・生活習慣の改善と向上を図る。
- ・ PTAは協力的である。地域行事に積極的に参加する保護者が多いものの、コロナ禍で実施は難しい。今後さらに、児童の規範意識の向上や生活環境の整備などに向け連携を深める。
- ・ たまサポ（学校支援地域本部）を中心に、学校の教育活動や独自の支援活動の体制が整っている。たまパパ（おやじの会）は9年目になる。今後も連携を深め、支援体制の充実を図る。
- ・ 「地域運営学校」への移行を視野に、地域教育連絡協議会を定期的に開催し、意見交換会や学校評価を行う。地域の声を教育活動に生かすと共に、本校への理解をより深めていく。

(5) その他 新たな課題への対応

- ・ 講師、支援員、補助員を効果的・計画的に配置し、学習指導の充実を目指すと共に、教職員のワークライフバランスに対する意識向上と、仕事の実質的な変革・軽減を図る。
- ・ タブレット端末（一人一台）の環境に合わせ、活用率の向上と新しい学びの構築を図る。区の「ICTサポーター（支援員）」を活用し、ICT教育の充実に努める。
- ・ 区の「感染症対策ガイドライン」に基づき、拡大防止を徹底した教育活動を実施する。

【目指す学校像に迫るための方針】

(1) <未来を創る力> 変化に主体的に対応し、未来を創る児童を育てる学校づくり

現行の学習指導要領「子ども主体の学校づくり」を推進する。

- 発達段階に合わせた「コミュニケーション能力」の育成（あらゆる場面で）
- 問題を自力で解決する学習や体験による、「論理的・科学的な思考力」の育成
- ICT機器を有効に活用できる「情報活用能力」の育成（タブレットの活用）
- 自分の言葉で伝え、認め合いながらチャレンジする子の育成 → 児童の健全育成へ

(2) <学びの力> 自分の考えをもち、表現できる児童を育てる授業づくり

児童の学びのために教師の授業力を高める。ねらいをもった授業、楽しく、よくわかる授業を行う。「わかった！ 分かった！ 解った！」と子どもたちが言う授業を目指す。

- 校内研究（体育科）の充実
- OJTの日常化
- 教育環境の充実

(3) <心の力> 互いに助け合い、豊かな心をもつ児童を育てる環境づくり

すべての教育活動で関わりを大切にしていく。教師と子どもの関わりは特に重要と考える。自分の居場所があり、互いに認め合い、励まし合い、高め合う関係・環境をつくる。

- 仲良く助け合う子ども
- 話を聞いてくれる先生
- 多摩川小の子はみんなの子

(4) <体の力> 健康づくりに取り組む児童を育てる日常づくり → 令和4年度の最重点課題

体力の向上を目指し、遊びと運動の好きな児童を育てる。給食の時間を中心に食育にも取り組んでいく。健康で安全な生活を送れるよう日常的に指導する。→ 健全育成を目指す

- 体力向上「一学級一実践」
- 食育の推進
- 早寝・早起き・朝ごはん

(5) <保護者・地域の力> 保護者・地域と協力・連携し、教育の成果を高める学校づくり

保護者・地域と共に、地域の特色を生かして子どもたちを育てる「共育」を推進する。

- 保護者との連携
- たまサポ・たまパパとの連携
- 地域教育連絡協議会との連携

3 目指す学校像に迫るための方策（中期的目標）※3年計画の3年目

教育目標の実現に向けて、次の5点を中期目標とする。

(1) 授業改善を推進し、教師の指導力の向上を図る。

- ・ 「教育は人なり」プロの教師としての自覚をもつ教師を育成する。
- ・ 「教師は授業で勝負する」～質の高い授業を創造していく。
- ・ 一人一人の子どもに確かな学力を付ける教育を推進する。
- ・ 校内研究を中心に、教員の学習指導力を高め、児童が主体的で協働的な学び合いを通して、深い学びを実感できる授業を提供する。
- ・ 校内OJTとして生活・学習の両面から日常的に指導技術を共有し、指導の工夫改善に努める。
- ・ 教師一人一人の自己の強みを確立させ、専門性の高い教師を育成する。
- ・ 保護者・地域、そして何より子ども（たち）から信頼される教師を育成する。
- ・ 体罰禁止、個人情報保護など、服務事故防止を徹底する。

(2) 互いに助け合い、豊かな心をもつ児童を育成する。

- ・ 児童が落ち着いて生活できる学校、安心して学べる学校をつくる。
- ・ 道徳教育・人権教育を、日常的に、さらに重点期間を設定し、充実させる。
- ・ 一人一人の児童の個性を伸長する学級（専科・サポートルーム）経営を実践する。
- ・ いじめ、不登校ゼロを目指し、相談体制（全員面談やカウンセリング）を強化する。
- ・ 「多摩川小の子はみんなの子」という考えに立ち、全教職員で児童理解と指導に努める。

(3) 体力の向上、健康の維持・増進を図る。 → 令和4年度の最重点課題

- ・ すべての児童の体力向上に向けて、体育部を中心に学校全体で組織的に取り組む。
- ・ 「一校一取組」および「一学級一実践」で、児童の体力の向上や達成感がはっきりと結果として表れるようにする。→ 運動の日常化を図る（授業だけでなく休み時間や放課後、休日も）
- ・ 「早寝・早起き・朝ごはん」を実践し、正しい生活習慣を身に付ける。
- ・ 各学級で給食指導を中心に、食育に取り組む。

(4) 学校・家庭・地域が一体となった「共育」を推進する。

- ・ 地域と共にある学校として、より一層学校を開き、保護者や地域の方々と協働する機会を設け、学校と家庭、地域が一体になった学校づくりを進める。（※コロナ禍であることを熟考の上）
- ・ P T Aや学校支援地域本部（たまサポ）、おやじの会（たまパパ）、地域教育連絡協議会を中心に、保護者や地域の声を積極的に取り入れ、保護者や地域との連携を一層図っていく。
- ・ 地域コーディネーターと連携し、特色ある教育活動を推進すると共に、P T A・地域・ボランティアの方々との連携を深める。
- ・ 学校便り・学年便り・学級便り等の各種通信、メール・HPなどで、積極的に本校の教育活動について、保護者や地域に発信する。

(5) 保幼小連携および小中連携の推進

- ・ 子どもたちの自己肯定感や自己有用感を高め、異学年と交流する喜びを味わわせる。
- ・ 幼児教育センターと連携して最新の情報を収集し、「スタートカリキュラム」を実践する。
- ・ 矢口中学校・矢口西小学校との連携を密にし、9年間を見通した教育を推進する。

4 本年度の取組目標と具体的な方策

(1) 教育活動の目標と方策

① 学びの力 向上のために

- ・ 現行の学習指導要領に則った指導を、全教員が実践する。
- ・ 問題解決学習を推進し、主体的・協働的に学ぶ意欲や達成感を高める。
- ・ 校内研究（体育科）を中心に教員の指導技術を高め、組織的に児童の健全育成を図る。
- ・ 外国語（5～6年）、外国語活動（3～4年）、特別の教科 道徳、総合的な学習の時間の充実を図り、学習指導要領の内容の確実な定着を図る。
- ・ 年間指導計画、週案等により、意図的・計画的に授業を行うと共に、常に授業改善に取り組む。
- ・ 毎時間のねらいを明確にし、児童が達成感を味わえる授業を行う。
- ・ 読書や漢字・計算などの基礎的・基本的な学習の定着に取り組む。
- ・ 学年や学校全体に、教師一人一人が授業を積極的に公開し、互いを高め合う。
- ・ 自己申告に基づき、教師が今年度の目標を明確にもち、キャリア向上に努める。
- ・ 授業の開始と終了の時刻を守り、学習規律（発表の仕方など）を徹底する。
- ・ 少人数指導や日本語指導、（非常勤教員、）講師、学習支援員、学校図書館司書等を活用した指導により、個に応じた指導の充実を図る。
- ・ 副校長アシスタントを活用し、副校長による人材育成を充実させる。教員支援員も活用する。
- ・ 校内O J Tとして、ベテランや中堅の教員から若手の教員に対し、日常的に業務内容や指導技術を伝承し、教師の資質能力向上に努める。

- ・ 区教研や都研修センター主催の研修、その他の研修会に積極的に参加する。
- ・ 自ら参加した研究会の情報は、OJTとして研修を実施し本校に還元する。
- ・ 体罰の禁止を徹底する。そのための研修や調査を実施する。

② 心の力 向上のために

- ・ 基本的な生活習慣、学校のきまり、マナーを定着させる指導を行う。
- ・ 「多摩川小のあいいうえお（あいさつ、いのち、うんどう、えがお、おもいやり）」を、全教職員で共通に声掛けし、児童の自己肯定感を高める取組を日々徹底する。
- ・ あいさつ、正しい言葉遣い、基本的な生活習慣は、教師が率先して垂範する。
- ・ 休み時間など、すき間時間の児童の安全管理に努め、問題を未然に防止する。
- ・ 「ふわふわ言葉」と「ちくちく言葉」を理解させ、言葉には影響力があることを指導する。
- ・ たてわり班活動や副籍交流活動を進め、豊かな関わりの中で思いやりの心を育む。
- ・ 人権尊重教育を徹底し、互いを尊重し、思いやる人間関係に立脚した経営を行う。
- ・ いじめ防止対策基本方針に基づき、いじめは決してしてはいけないことを徹底する。
- ・ 特別支援教育を推進し、教師の児童理解力を高め、サポートルーム（特別支援教室）を含めた教師間の情報交換を密にすると共に、報告・連絡・相談を徹底する。
- ・ 年2回の「子どもを語る会」や「生活指導の会」等で、課題のある児童について全教職員で共通理解し、その対応や課題の生じた学級への協力体制を組織的に構築する。
- ・ 体験活動を通して、社会性を身に付けると共に、自然への感謝や畏怖の心を育み、働くことの意味や社会貢献の大切さを知らせる。
- ・ 不登校対策・問題行動対策を組織的に行う。（SCやSSW、支援員を活用する）
- ・ 保護者や関係諸機関（巡回相談、民生児童委員、子ども家庭支援センター、児童相談所等）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努め、児童虐待やいじめ・不登校を予防する。

③ 体の力 向上のために

- ・ すすんで運動に親しむ児童の育成を全教員で取り組む。
- ・ 体育授業の授業改善に取り組み、運動量を確保し体力向上を図る。
- ・ なわとび、持久走などを通して、継続して運動に取り組ませる。
- ・ 体力テストの結果を分析し、マネジメントする。体力向上の方策を立て実行する。
- ・ 「一校一取組」および「一学級一実践」で体力向上や達成感が結果として表れるようにする。
- ・ 「早寝・早起き・朝ごはん」の実践と正しい生活習慣を身に付ける。
- ・ 各学級で給食指導を中心に、食育に取り組む。「日本の善き食文化」を継承する。
- ・ 体育学習だけでなく、休み時間や放課後、休日にも遊びや運動に取り組む児童を育成する。

④ 保護者・地域の力 向上のために → コロナ禍の教育活動からウィズコロナの教育活動へ

- ・ 学校支援地域本部（たまサポ）のコーディネーターを中心に、地域の教育力を積極的に学校教育に取り入れる。
- ・ 特色ある教育活動である、多摩川の自然環境を生かした教育活動を推進する。
- ・ 読み聞かせ会の方々など、教育支援ボランティアの力を教育活動に生かす。
- ・ 区や地域主催の行事に、子どもを積極的に参加させ、地域の一員としての自覚を促す。
- ・ 学校便り・学年便り・学級便り等の各種通信、メール・HP等で本校の教育活動を発信すると

共に、保護者や地域の声を積極的に取り入れ、連携を一層図っていく。

- ・ 学校公開、授業参観、保護者会、体育健康教育授業・道徳授業地区公開講座、運動会、学芸会などの諸行事を通じて保護者や地域の方々に教育活動を理解していただくよう努める。
- ・ 外部評価（アンケート、外部評価など）を教育活動に生かす。
- ・ 災害発生時に適切な行動がとれるよう、防災教育を進めると共に、地域と連携して対応できる体制を構築する。

⑤ 保幼小連携および小中連携 → 幼児教育センターとの連携

- ・ 近隣の保育園・幼稚園との交流する中で、進学・進級の喜びを具体的に味わう。
- ・ 新入生に対し、入学後の学校生活が円滑に始められるように「スタートカリキュラム」を実践し、小一プロブレムが起こらないようなきめの細かい指導を行う。（幼児教育センターとの連携）
- ・ 学習や生活上の課題について話し合い、9年間の教育課程を見据えた連携を行う。
- ・ 小学校児童と中学校生徒が交流する場面を設定し、中学進学への見通しをもたせる。
- ・ 中学校教員の出張授業や小中教員の実技研修などを通して、教員間の連携を深める。

(2) 今年度の数値目標（昨年度の「保護者アンケート」より）

昨年度、全21項目中19項目で肯定率90%を超えた。

今年度は、次の5項目について特に意識して取り組む。全項目で90%超を目指す。

- ① ご家庭は、学校やPTAの行事に積極的に参加しているか。（75% R3は82%）
→ コロナ禍だが、保護者に積極的に働きかけ、学校への帰属意識・参加意識を高める。
- ② お子さんは、挨拶や返事、言葉遣いなどの基本的な生活習慣が身に付いている。（89.7%）
→ 昨年度、低下した。日頃から教職員で率先して声を出し、全校的な向上を目指す。
- ③ 学校は、地域の力を教育活動に活かし地域と連携して子どもを育てている。（90.0%）
→ コロナ禍ではあるが、ウィズコロナの取組を積極的に推進し、地域の協力を仰ぐ。
- ④ 学校は、教育活動を公開し、たよりやホームページで学校の様子を伝えている。（90.9%）
→ 公開を推進し、メールやHPでも教育活動を保護者や地域に伝える。
- ⑤ 先生に話を聞いてもらったり相談したりしている。（93% R3は88%） → 更に向上へ